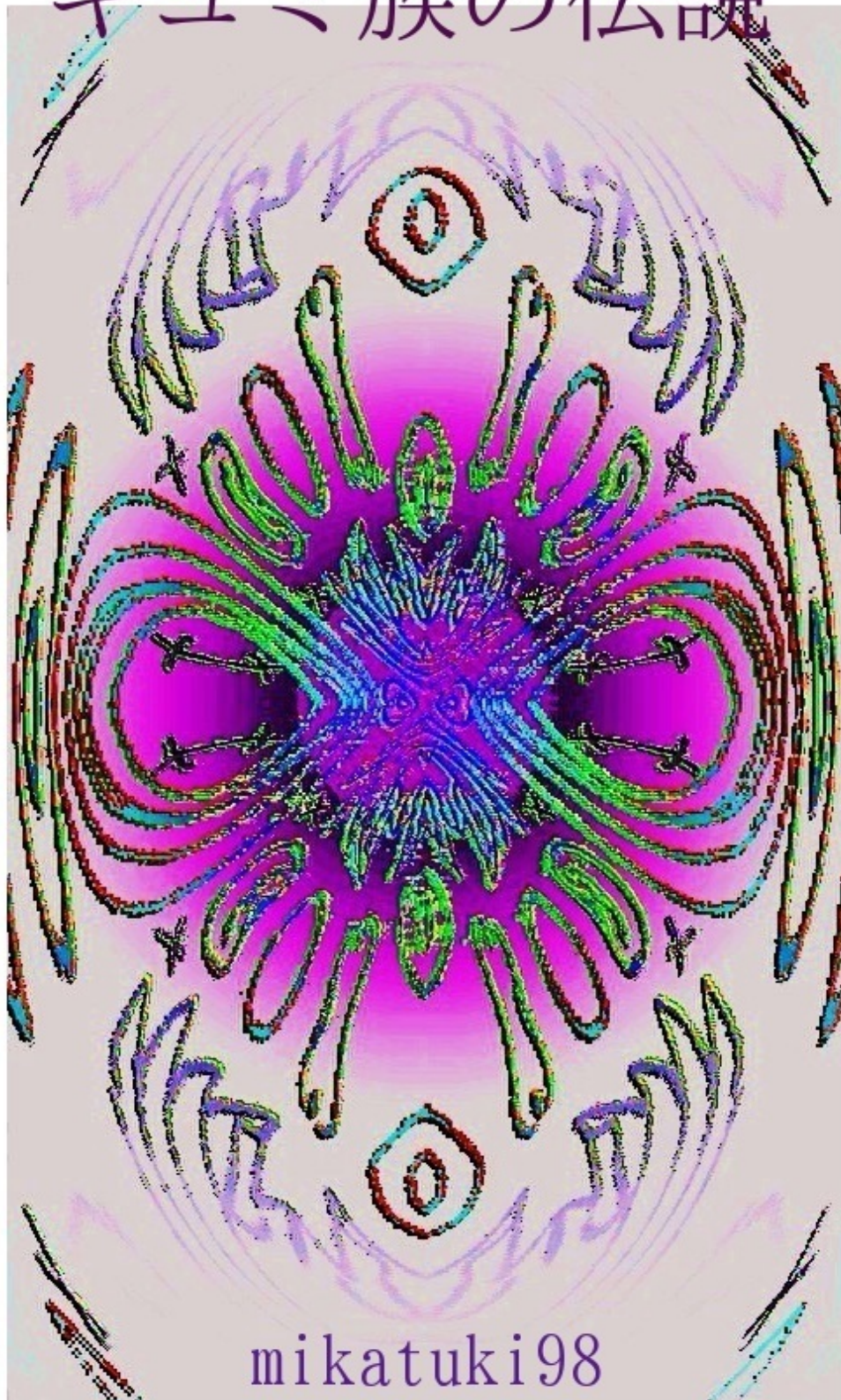


キュミ族の伝説



mikatuki98

ぎぎぎ……ぎぎぎ……ぎす……ぎす……ぎすぎす　ぎすぎすぎす　ぎ・ぎ・ぎ　バサッ！

キーロンの翼がある日突然、錆び付いた機械のような音を出して動かなくなってしまったから、何日経つだろう。双子の弟ユーロンは、初め兄が自分を驚かそうと思って、冗談で翼が動かなくなった振りでもしているのかと思っていた。しかしユーロンがそう思い込むのも当然で、日頃から明るくひょうきんな性格の兄キーロンは、いつも通り暗い表情一つ見せないどころか、毎日笑顔で過ごしていたからだ。そしてキーロンがやっと弟ユーロンに真実を打ち明けたのは、翼が異変を起こしてから10日も経ってのことだった。

「ユーロン落ち着いて聞いてくれ。実はわたしの翼は、本当に動かなくなったのだよ」

「何！？　本当だったのかキーロン！！」

「ああ。どう頑張ってもビクともしない」

「何処かで酷く打ったりしたのか？　それとも怪我をしたのか？」

「いや、何処かで打った覚えも無いし、怪我をしたような記憶もない」

「じゃあ何故！？」

二人が顔を寄せ合い、何やら親密に話している様子を部屋の隅で怪訝そうに見ていた妹のミーロンが、フワフワと翼を揺らしながらふたりの側に寄ってきた。

「ねえ、お兄様たち。お二人だけでさっきから何を話していらっしゃるの？」

「あ、ミーロン！　い、いや、何でもないよ」

「あら、何でもない筈ないわ！　なんだかお兄様たちお二人とも、深刻なお顔をしていらしてよ」

「いや、ミーロン。本当に何でも無いんだよ。明日は大事な翼のお披露目の日だろう？　早く寝た方が翼が綺麗に見えるよ」

「……そうね。少しでも翼を綺麗に見せたいわ。ね！　お兄様たちお二人とも明日のキュミ・オ・マリッツには来て下さるわよね？」

「ああ、勿論だよ！　可愛いわたしたちの妹、ミーロンの門出だからね」

「ふふふ。では、おやすみなさい。ミーロンの愛するお兄様たち」

「おやすみ。愛するわたしたちの可愛い妹ミーロン」

双子の兄弟は声を揃えてミーロンに優しく応えた。フワフワと翼を揺らしながら部屋を出て行くミーロン。その様子を見送りながら、二人は耳を澄ませてミーロンの部屋のドアが閉まる音を確認すると、再び声を潜めて話を続けた。

「キーロン、翼が動かなくなった原因も気になるが、とりあえず明日のキュミ・オ・マリッツはどうする？　ミーロンはわたしたち二人と一緒に来てくれると思い込んでいます。しかし、行けばミーロンの兄として翼を必ず三回、皆の前で羽ばたかせなくてはならない。そういうシキタリだ」

「ああ、今はそれが一番の心配事だ。そう思ってミーロンに気付かれないように密かに羽ばたきの練習をしてきたが、一回羽ばたくのが精一杯だ。しかも、ぎすぎすと変な音がしてゆっくりとしか動かせない」

ぎ・ぎ・ぎ　ぎす……　ぎす……

ユーロンに一回の羽ばたきを見せようと試みたが、さっきまでの練習で疲れ切っていたのか、力尽きてしまったようにキーロンの翼はだらんと垂れ下がってしまった。

「嗚呼！　なんてことだキーロン」

兄キーロンの自慢の紫の翼が目の前で生気を失っている様子を見て、ユーロンは自分のことのように悲しくなり、薄っすらと目に涙を浮かべた。

「……とりあえずユーロン、明日はお前がミーロンの側に居てやってくれ。理由は何とでも考えておく。翼が動かせないとすると、キュミ族としての資格を失うどころかわたしはココにはもう居られなくなる。いや、それよりもユーロンとミーロンの肩身が狭くなる」

「そんな！　わたしたち二人のことなんか考えなくていい！　わたしたち三人、お母様がミーロンを産んで亡くなられた日から三年後、今度はお父様が王の命で狩りに行かれたまま行方不明になってしまってからというもの、本当に辛い日々だったけれど、力を合わせて今日まで仲良く頑張ってきたんじゃないか！　キーロンにもしものことがあったら、わたしたちもキュミ族であることを捨てる覚悟は出来ている！」

「ユーロン、ありがとう。その言葉だけで充分だ。しかし、私はお母様が息を引き取る前に約束をしたのだ。ユーロンとミーロンを守る！と……」

キーロンはおもむろに天を仰ぐと、遙か遠く、其処には母の面影があるような眼差しで見つめ、何かを決心したような表情を見せると、再びユーロンの瞳に自分の瞳を映し、告げた。

「明日、ミーロンのことを頼む！　約束してくれ」

「ああ、分かった。ミーロンのことは任せてくれ！　約束する」

ふたりは硬く手を握り合った後、今までのお互いの苦労をいたわり合うように強く抱きしめ合った。

* * * * *

『キュミ族の伝説』によると、翌日キーロンはユーロンとミーロンの二人を<キュミ・オ・マリッツ>即ちキュミ族の伝統的な成人祭に送り出した後、自分の動かなくなった翼を背中から挽ぎ取ると、それを形見として家に置き十一年前に狩りで行方不明になった父親を探す旅に、独り出て行ったという。

そしてミーロンは、<キュミ・オ・マリッツ>で見事その年の<キュミ・オ・プリッツ>即ち成人（十四歳）を迎えたキュミ族の中で一番美しい翼を持つ者として選ばれた。

その時、ミーロンの身内として一緒に翼を羽ばたかせたユーロンの青い翼の美しさと気高さに、今上の王を初め多くの者がたちが魅了され、皆が次代の王になることをユーロンに望んだ。

しかし、ユーロンは家に残っている双子の兄キーロンのことを思い、次代の王の座に就く意思は今は無いことを告げ、<キュミ・オ・マリッツ>の会場を後にした。

ところがユーロンがミーロンを伴い家に戻ると、兄キーロンの姿は何処にも無く、テーブルの上にはキーロンの光沢のある紫の翼と、薄紫の封筒に入れられた一通の手紙が残されていること

に気が付いた。

ユーロンは胸騒ぎがして急いで手紙を読んだ。そしてそこに書かれてあった真実に愕然とする。その時、ユーロンは自分が次代の王の座に就くことは兄の願いでもあることを悟り、いずれ今上の王と皆の望みを受け入れることを決意したのである。

親愛なる弟ユーロンへ

突然、いなくなってすまない。わたしの翼が動かなくなったことは、必然だったのだ。

今から十四年前、お母様がミーロンをお産みになりご自分の寿命を悟られた時、お母様はわたしだけを枕元へ呼ばれ、かっと目を見開くところおっしゃられた。

「イーロン、そなたはわたくしの本当の子ではありません。ユーロンを産んだその日の夜、お父様が狩りからお帰りになる途中、突然、月から後光が差して女神様が現われると、お父様にひとりの赤子をお授けになり、こうおっしゃいました。『この子を今日生まれたそなたの子・ユーロンと共に育てなさい』 その赤子がイーロン、そなたです。時期が来たら、そなたの翼は使命を果たす為に動かなくなります。辛いでしょうけれど、それが女神様から告げられたそなたの宿命です。即ち、キュミ族を守る使命を背負う者。いずれゲッシュウザンに潜む魔物と闘わねばなりませんまい。わたくしの寿命が尽きる今、お父様からそなたを預かった時にそなたの懐に入れていた、この紫の三日月のペンダントを渡す時が来たようです。これからはこの三日月のペンダントを肌身離さずお持ちなさい。そしていよいよ翼が動かなくなる日まで、どうかユーロンとミーロンの側で二人を守ってあげてください」

わたしは未だ十歳になったばかりだったが、お母様がわたしに頼まれた最期の言葉を胸に刻み、今日まで生きて来た。お父様が行方不明になってからは、ユーロン、ミーロンと三人で過ごした日々、辛いこともあったが、楽しい思い出もわたしは決して忘れない。

今、その時が来たことを悟り、わたしはこの紫の翼とお母様のお言葉を二人に遺し、お父様の行方が分からなくなったゲッシュウザンへ行く。

ユーロン、そなたはいずれ次代の王となる日が必ず来る。その時、真紅の翼を持った娘がキュミ・オ・マリッツに現われ、キュミ・オ・プリッツになる筈だ。そなたはその者を娶り、王となる。必ずや王となる。そして紫の翼を持った男子が生まれ、未来永劫キュミ族は栄えて行くのだ。

何故ならば、それはわたしの魂であり、わたしの母・月の女神の申し子であるからだ。

最後にユーロン、ミーロンを頼む。いずれミーロンを守り、ミーロンを大切にしてくれる男子

が現われる筈だ。ミーロンの淡いピンクの翼に似合った、優しい水色の翼を持った男子。その者が現われた時、ミーロンと一緒にさせてやって欲しい。わたしたち二人の可愛い妹だからな。

では、ユーロン！ 名残惜しいが、わたしは行く。
必ずや王となるように！

永遠の兄弟キーロンより

* * * * *

ユーロンはその後、キーロンの手紙の通り次代の王となり、それ以来ゲッシュウザンの魔物は姿を消して、キュミ族の人々が惑わされることも無くなった。そして王と後の間にキーロンの言通りに紫の翼を持った皇子が生まれると、キュミ族は益々繁栄して永遠の安泰を国にもたらしたとされる。